

クーデンホーフ・カレルギー著

鹿島守之助訳

「パン・ヨーロッパ」

(鹿島研究所出版)

金丸輝雄

一九五〇年、西ドイツのアーヘン市は、同市がヨーロッパ統合に貢献した者に与えるシャルルマーニュ国際賞の第一回受賞者に、本書の著者、クーデンホーフ・カレルギー伯を選んだ。現西独首相アデナウアーは、カレルギー伯の同賞受賞に際し、次の如き祝電を贈っている。「今日、貴下にシャルルマーニュ賞が授与されたことに対して、私の最も親しい祝詞をおうけとり下さい。アーヘン市は、この重大な授賞に際してヨーロッパ思想の数あるパイオニアのなかで、貴下よりも功積ある一そふさわしい人物を選ぶことは不可能であったと私は信ずるのであります。貴下は実に多年にわたって不撓不屈の活動をつづけられました。ヨーロッパ諸国の統一を次第に準備してこられたその功積によって、歴史のなかに偉大な足跡をのこすこと

でありましょう。」周知の如くアデナウアー首相は熱烈なヨーロッパ統合論者である。この祝電が単に儀礼上のものであると考える者は、第一次大戦以後のヨーロッパ統合運動にいささかの関心をよせる程の者の中には、決していないであろう。まことに、カレルギー伯は、本書「パン・ヨーロッパ」(一九二三年出版)により、ヨーロッパ統合の思想と統合が緊急不可避であることとを、ヨーロッパ人に対してのみならず、世界の人々の前に訴え、以後、自ら、ヨーロッパ統合のための思想的・実践的運動に身を投げ出すこととなったのである。以来、次第に多くの人々により支持され、発展して来た、そのヨーロッパ統合運動の戦後の成果として、我々は今日、ECS C (欧州石炭・鉄鋼共同体)、EURATOM (欧州原子力共同体)、EEC (欧州経済共同体)の三つの組織体を代表的なものとしてあげ得るのであるが、中世以来、ダント、デュボア、ウィリアム・ペン、サン・ピエール、ルソー、カント等により、深められ、受けつがれてきたと云われているヨーロッパ統合思想が、「パン・ヨーロッパ」において、はじめて具体的な実践的課題をおびた思想として提起せられ、右にかかげた如きヨーロッパ統合体を産み出す原動力となったのである。現在、世界の指導者や一般民衆から驚異の目でむかえられている、EECを中心としたヨーロッパ統合体によるヨーロッパ統合の発展は、ヨーロッパ各国の政界指導者や新興の「ヨーロッパ」官吏等の推進力に負うところが大きいのであるが、彼等のもつヨーロッパ統合思

想に「パン・ヨーロッパ」が与えた影響を見逃すことは許されない。また、「パン・ヨーロッパ」において展開されている思想が、その理論的体系において欠けるところが多いにせよ、若千二十八歳の混血青年によってかかれたこの一冊の書物が、世界の耳目を湧かせるに足るだけの力を持ち得たことを、我々は否定できないし、訳者が再版のことばのなかで指摘しているように、本書におこまれた思想をそのままの形で受けとめることは、多くの点で、今日の立場からは無理であるにもかかわらず、右に述べてきた意味において、本書がもつ歴史的意義に、依然、変りはない。

本書は十二の章より構成されている。まずそれを紹介しておく。第一章では「ヨーロッパと世界」の関係について論じ、以下、第二章ヨーロッパの境界、第三章ヨーロッパとイギリス、第四章ヨーロッパとロシア、第五章ヨーロッパとアメリカ、第六章ヨーロッパと国際連盟、第七章ヨーロッパ戦争の危険、第八章世界戦争後のヨーロッパ、第九章ドイツとフランス、第十章国民問題、第十一章パン・ヨーロッパへの道、第十二章パン・ヨーロッパ運動の三ヶ年、となっている。このうち最後の章は、初版本にはなかったもので、本書の初版公刊後三年間のヨーロッパ統合運動について述べたものである。この外に、訳者の夫人の手になるもので、原著者の母、光子夫人（日本人）を紹介したもの、「一九六一年のヨーロッパ」と題した原著者の講演、訳者の「ヨーロッパ合衆国論」が、附録として収めら

れている。加えて、第一次大戦後のヨーロッパ各国の指導的政治家のヨーロッパ統合に関する意見が紹介されており、これにより本書がいかに大きな政治的・思想的影響を欧州の政界のみならず、各界の人々に与えたかを知る上で、本書を一層興味深いものにしていく。

著者が、ヨーロッパ統合のが必至不可避であることを説く直接の動機は、第一次大戦を境として、世界におけるヨーロッパの地位が、アメリカとロシアという巨大国家の出現によりほりくずされたことと、勿論相対的意味においてであるが、「爾余の世界が日々向上するにかかわらず、ヨーロッパは日々退歩する」という事実との認識による、ヨーロッパの将来に対する著者の危機意識に求められる。しかし「指揮者なく計画なく、一つの危機から他の危機へ彷徨」している、破瀾に富む危機のヨーロッパを産み出した真の原因は、米・ソ二大強国の胎頭や爾余の世界の飛躍的發展ではなく、むしろそれはヨーロッパ内部の事情、即ち、ヨーロッパ諸国の「政治制度」の老衰に求められなければならない。何故ならヨーロッパ人がもつヴァイタリティが老衰の境に入って、自らの力で彼等の文明や協調を維持できなくなったが故にヨーロッパの後退がはじまったというのでは決して云えないからである。ヨーロッパ諸国間の協調という点に関して云えば、近世初頭以来、そこでは対立と闘争が支配してきたといっても過言ではない。事の本質は、この対立と闘争を産み出し、ヨーロッパ人の生活の基盤を支えて来たヨーロッパの

「政治制度」が、ヨーロッパの内部に対する場合はもとより、ヨーロッパの外部に対する場合においてもはや、今日的な政治的・経済的等々の課題に應え得なくなったことの結果として、かつてない危機がヨーロッパに訪れているのだという点に求められなければならないのである。端的に云えば、ヨーロッパにおいて「歴史的に発展したような個々国家は、将来その独立の存在を保つにはあまりにも小」さすぎるのである。ヨーロッパという狭い地理的範囲の中に小さな独立の国家がひしめき合って存在している状態それ自体がヨーロッパに危機を招く最大の原因なのである。これらの小さな国々は、今日の発達した交通、通信等の技術に適應する能力を欠いているし、発達した生産力を背景にして築かれていて、今日の大規模経済にも適應する能力を欠いている。技術（生産力）の発達が、国家の近代規模と存在形式を乗り越えてしまっているにもかかわらず、近代国家は依然としてその前に立ちほだかっているし、大規模経済が、国家による関税障壁を打破しようとする傾向をもってゐるにもかかわらず、依然として各国家は、国内産業保護のために、関税障壁を高くかかげて、大規模経済の一層の発展を抑制している。こうして、「ヨーロッパは、近世の交通技術」や生産技術を「近世の国家技術をもって補充しなければならぬ」といふ著者の認識がうまれてくるのである。ここにいう近世とは勿論現代を指しているのだが、著者によれば、「近世」の国家技術を適用してつくられた国家は、今日ではアメリカと

ロシアだけであり、この両国は厳密な意味での近代国家ではないのである。アメリカとロシアという、異なった社会組織をもつ二つの国を、形式的に割り切つて扱ふことはラフであるが、著者の意図するところは了解できるであろう。ともあれ、著者によればこの二つの国の出現以来、小さな独立の近代国家が大列強として世界に君臨していた時代は過ぎ、今や、アメリカとロシアという、近代的な面を脱却しはじめた国家が、世界列強として地上の社会に君臨する時代に入っているのである。ヨーロッパの諸国家と諸国民は、この二つの多民族的連邦国の例にならつて、ヨーロッパ連邦国を創設するのでなければ、やがて人類史の表舞台から没落する運命を余儀なくされてしまうであろう。何故なら、アメリカとロシアが今日の世界に君臨していることは、単純に、これらの国家が強大な国家であることを示すだけではなく、近世以来、人類史を支配して来た近代国家に代つて、何らかの意味で、国家の近代的な在り方を乗り越えた存在形式をもつ国家が、やがて人類史に君臨することを暗示するものだからである。したがつて、ヨーロッパは、単に「強大」になるためではなく、世界史の趨勢におくれをとらないために政治的近代を乗り越えざるを得ない状況に追いこまれているといえよう。

今日まで、地理的概念としてのヨーロッパは存在してきたし、今日も依然それは存在する。また、それがギリシア的・ローマ的・キリスト教的文明であるという点において、文明上のおお

まかな概念としてのヨーロッパは存在してきたし、今もなおそれはつづいている。しかし、政治的概念としてのヨーロッパは近世初頭以来存在しなかったし、今日も依然存在していない。存在するのは、ドイツであり、フランスであり、イギリスであった。このような状態のもとでは、人種の意味においてならともかく、政治的・社会的意味においてのヨーロッパ人は存在し得ず、今日にいたるもなお、ヨーロッパ人はヨーロッパをその手中から喪失しているのである。ヨーロッパの住人は、ヨーロッパを自らの掌中のものとするた、近代国家の統合により、政治的概念としてのヨーロッパを建設しなければならぬという要請を、今日の国際社会の状況の中で必至的にうけおわされているのである。政治的概念としてのヨーロッパが成立したあかつきには、ヨーロッパ内においては、国境紛争とか市場競争戦争、或いは資源をめぐる対立等は、徐々にその姿を消し、やがては民族的な対立感情も歴史の舞台裏へと退いてゆくであろう。何故なら、統合されたヨーロッパにおいては、国家間の敵対的な利害対立が存在しなくなるばかりでなく、政治的・社会的諸機構の統一、住民の移住ならびに居住の自由確立による相互交流、民族の混合等により、民族的な対立感情を産み出す客観的・主観的諸条件が、消滅の過程をたどると考えられるからである。したがって、そこにおいては、今日のヨーロッパに存在する近代国家は、もはや国家としての存在意義を失うであらうし、当然に、近代的意味での国家と国民という概念も消滅

していくであろう。このようにして、将来近代「国家と国民との分離は、かつての、教会と国家の分離にも劣らぬ大なる文化事業となるであろう。『国家の民』なる概念は国家の教会なる概念と共にひとしくすたれゆき、『自由国家』における『自由国民』なる原理に譲るであろう。なんとすれば、国民とは精神の邦国であつて、境標によっては決して区画しえられないものだからである。」

実際のところ今日という歴史的段階に立つて考えるならば、異なる民族であるが故にな異なる国家を形成し、異なる国家に属するが故に居住国の恩恵や特典を享受できなかったり、人間が民族的に互に反目し、恐れ、軽蔑しなければならなかったりする論理的根拠は全く存在しない。いわんや、「優越」民族と「劣等」民族とを区別するが如き、そして、「優越」民族の「劣等」民族に対する支配を合理化するが如き論拠は毛頭存在しないのである。民族主義的な近代思想の一つの極端な思想としてそれは存在して来た。しかし、我々はこのような思想的虚構を打破しなければならぬ。更に「ヨーロッパ国民」(鹿島守之助訳、鹿島研究所出版)の中で、著者も指摘しているように、人類は、これまで、人種的・民族的に交流の歴史をたどってきたのであるが、それは、近代に入つて民族国家というワクのなかに固定された民族がつくられた後においても、依然としてつづいてきたのである。この地上に「純血」を誇り得る民族はないし、民族の「純血」を誇ろうとすることは、歴史の事実盲目

な非科学的態度にすぎない。人類史の今日的時点に立つ我々は「民族形成史」ではなく、「民族交流史」を発掘し、発展させなければならぬその出発の時点に立たされていると云えよう。ちなみに、本書の著者、クーデンホーフ・カレルギー伯は先祖にロシア人とポーランド人の血をもち、日本人を母親としてこの世に出ているオーストリア人である。

更にヨーロッパと世界を二度の大戦にまきこんだ、独・仏の民族的対立を深く考慮するならば、我々は一層切実に、民族的対立止揚の必要性を認識できるのである。ヨーロッパが、アメリカとロシアとの谷間におち込み、この二つの国家に世界の指導権を奪い去られた今日、ヨーロッパの内部で、市場や資源をめぐる民族的对立をひきおこすことは、それだけヨーロッパの世に於ける地位を下げることに貢献するのみである。したがってヨーロッパの諸国が、統合してヨーロッパ合衆国を建設する以外に、ヨーロッパの復活はあり得ないという緊急不可避の要請の前には、独・仏両国の過去十世紀におよぶ民族的対立も、もはやその影をおとさざるを得ない。ヨーロッパがその統一を達成し得るか否かは、実にこの両国の関係如何にかかっているのである。独・仏の対立を終燦させる二つの方法がある、と著者は指摘する。すなわち、両国は対立をつづけることによって、互に傷つき共に倒れてしまうか、或いは両国が、和解と融合の政策により統一を実現するか、両国は二つのうち一つをえらばなければならぬ。第一の道は、独・仏のみならず、ヨーロッパ

全体を、米ソの前に屈服させてしまうであろう。第二の道は、独・仏のみならず、ヨーロッパ全体の統一を産み出し、ヨーロッパに繁栄と平和とをもたらすであろう。両国がとるべき道はおのずから明らかである。独・仏の対立を永久に葬り去るために最も有効な手段は、両国の国境、国民、国家の止揚であり、資源と市場の統一である。けだし今日の世界の無秩序にかわつて、もし将来、世界に秩序があらわれるとするならば、何よりもまず、近代「国家は超国家に結合せられるべきであろう」が、ヨーロッパにおいて、それはまず何をおいても、フランスとドイツとに於いておこなわれなければならないのである。

ところで今日の世界に国際戦争をひきおこす根源は、独立の近代国家が存在すること自体に求められるとする、一貫した平和論者である著者は、今日的な形態の戦争から人類を解放し、世界に平和と繁栄とをもたらすために、国家はその今日的な存在形式から、それらが統合された超近代的な存在形式に高められなければならないと考えている。著者のこのような論法からは、世界合衆国の建設という考え方が必然的に産み出されてくるのであるが、しかし、だからといって、今、直ちに各国の主権を移譲することによって世界政府を建設しようなどという世界政府論者の夢想とはことなり、一つ一つの段階を現実的に積みかさねることによりやがては世界合衆国を建設しようとする著者の考えは、いわば現実論を背景にもった理想的ともいふべき達見であるが、その目的に沿って、著者はまず当面の目

標として、現在地上に存在する国家を統合し、数個の国家にまとめてしまうことを提唱している。建設されるべきヨーロッパ合衆国は、その中の一つとして位置づけられるのである。しかし、数個の国家の建設を唱えるにあって、アフリカ大陸が独立の地域として位置づけられていないところに、本書のもつ限界がみられる。著者は、植民地が崩壊することを全然考慮に入れていないばかりでなく、植民地は当然にそのまま存続するものと考えている。こういった点に対して、我々は批判的に読み取ることができし、著者の戦後の著作をみるならば、植民地主義的思考様式はかなりの後退を示している。いずれにせよ、ヨーロッパにおいて超近代的国家を建設する事業は、まずフランスとドイツの統合からはじめなければならないことに変わりはない。かくして、人類にはかり知れない損失を与えた独・仏両国の、その「不吉な不和から」彼等の『逃れ道を見出すことは、フランスおよびドイツのプロレタリアートのさし迫った仕事である』とも云い得るのである。何故なら、近代を支えた者が象徴に云えばブルジョアジーであったと同じ意味において、超近代を支える者は今日のプロレタリアートでなければならぬからである。

さて、近代的な存在形式をもつ国家が右に述べたような道をたどって発展的に消滅すると思われるならば、そのように大規模の国家を支えるに足るだけの生産力があるの裏づけとして存在していなければならないが、すでにふれたように、著者が、今日

の発達した技術や生産力が、今日ヨーロッパに存在する近代的な国家のワクをのみ出して発展しつつあると指摘していることは、逆に、超近代的な国家の存在形式を支えるに足るだけの生産力が芽ばえはじめているにもかかわらず、政治の世界が経済の世界のこの変化に適応できないことを物語っているといえよう。生産力と生産関係の矛盾から世界史の動きを説きおこそうとする論法に立脚すれば、超近代的な世界像を、近代的な民族国家社会というワクの中に規定することはできないのである。云う迄もなく、著者は、ヨーロッパの統合を資本主義的必然とみなし、「ヨーロッパ合衆国に反抗する資本主義的抵抗は、資本主義それ自身によって破られるであろう。」とのべている。ただし、資本主義的近代が育つ地盤となった、近代的な存在形式をもった国家が、発達した生産力に対応しつつある資本主義的近代経済それ自身によって打破されつつあるという現実の中に、我々は歴史の逆説を見出し得るのではなからうか。

近代の生産力が、民族共同体を地盤にした、民族国家としての近代国家を産み出すだけの力しかもち得なかったとするならば、前に指摘したように、現在の技術と生産力がすでに近代の民族共同体を乗り越えた多民族的共同体を地盤にもつ経済的・政治的体制を要請しつつある傾向にあるのであるから、民族的対立を産み出した近代的な国家の存立基盤は徐々にではあるがくずされつつあるといえよう。

かくして、ヨーロッパの統合は、今後の人類がもつであろう

世界像を示す点において、ソヴェト革命にまさるともおとらぬだけの意味をもつ重要な例となるであろう。何故なら、チャーチルが指摘しているように、『すでに着手されたヨーロッパの連合を目指すこの運動は、ヨーロッパの思想、構成、生活の根底において、非常に重大な、おそらくは決定的な変化がもたらされるまでとはとどまることを止めない』であろうから。